



Osaka Gakuin University Repository

Title	疑問の which Interrogative <i>Which</i>
Author(s)	近松 明彦 (CHIKAMATSU AKIHIKO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 23 巻第 1 号 : 39-55
Issue Date	2012.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

疑問のwhich

近 松 明 彦

Interrogative *Which*

CHIKAMATSU AKIHIKO

ABSTRACT

In this article, we attempt to describe some grammatical/stylistic characteristics of the English interrogative marker, *which*.

The word, *identifiability*, is a term that some linguists (Huddleston and Pullum (2002: 368), for example) use when they characterize the English definite article, *the*. It is said that *which*-questions are important in considering the term *identifiability* (*Ibid.*). We can say that something is identifiable if we can correctly answer a *which*-question about it. This article explores, *which*, in the context of a semantic analysis of the English verb, *identify*.

Analysis of literature revealed that a concept termed <non-firstness> (Chikamatsu 2009b), a semantic feature of the verb, *identify*, is compatible with an observation that *which*-question is a part of a communicative process whereby an object is recognized in two steps. We argue that this compatibility relates the concept of *identifiability* to the interrogative word, *which*.

1. はじめに

which を、who や what など、他の wh 語と比べるとき、which は、他の wh 語と明瞭に対立し得るだけでなく、場合によっては、両者は、同一文脈の中で互いに交替したりし得るのではないかと思われる。しかし、そのような場合であっても、全く自由に交替するのではなく、何らかのニュアンスの相違を伴いつつ、相互に競合するのではないだろうか。このようなことは、我々が外国語として英文を綴るとき、また、指導している学習者が書いた作文を添削する時などに感じられる文体的な揺らぎの1つの例と言えるかもしれない。このように英文を産出する際の文体の差異について、観念的な内省を行うだけでなく、英語の実例を実地に観察する中で、which の振舞いを現実的に把握することが重要なのではないかと考える。

本稿では、which の文体的な特性理解にも役立つような仕方で、which についての文法的な特徴記述を行うことを目的としている。特に、identifiability (同定可能性) との関連で which をどのように理解すべきか、ということに重点を置きつつ、議論を試みたい。

2. 問題の背景

which の特質を考える上で関係してくる重要な事項の1つに、英語定冠詞 the、及び、the を特徴づける言語学用語として、例えば Huddleston and Pullum (2002: 368) など で言及されている、identifiability という考え方がある。

この identifiability の考え方は、which を用いた質問を先取りするという視点から、何よりもよく了解される、という内容の説明が、Huddleston and Pullum (2002: 368) による記述等には見られる。このような定冠詞を分析するための考え方を表わす identifiability という名称は、言うまでもなく、identify 「同定する」からの派生に基づいている。そのような言語学用語 identifiability の表わす概念を適切に了解するために、拙論 (2009a)、(2009b)、(2010a)、(2010b) では、英語動詞 identify の意味に

ついて分析を試みた。

本稿では、identifyの意味について吟味した、それらの研究結果に基づきながら、whichで始まる疑問文が、identifyによって指示されるプロセスと、どのように関係するのかという問題を最初に考えることにする。上で触れたように、先行研究の中でidentifiabilityの考え方を説明するためにwhichを用いた質問が使われているからである。

以上をまとめると、上で触れた問題に関係する要素は、主に次のようなものである。

- (1) a. theの使用
- b. identifiability (<identify)
- c. whichを用いた質問の先取り

本稿における以下の議論では、(1a)にあるtheについての冠詞論的問題を背景とし、更に、(1b)に示されたidentifyの意味的特質と関連したかたちで、(1c)に見られるwhichの特性に関する問題を考えることにする。

3. 先行研究

次に疑問詞whichについての先行研究では、どのようなことが既に明らかにされているのであろうか。

幾つかの先行研究を参照すると、which疑問文については、最初から答えを探すのではなく、一度候補が絞られて、可能な回答の候補の集合が作られた上で、その中から答えが選ばれるという特性が見られるという見方が定説となっていると見ることができよう。

たとえば、Declerck (1991: 283) では、「同定可能」(identifiable)という要素が見られるが、それと共に、「選抜」(choice)という要素も見られる。また、Huddleston and Pullum (2002: 902) には、「選択的」(selective)という考え方が出てくるが、これは、すぐ前に言及した、

Declerck (1991) における「選抜」に近い特性に言及する際に使われているのであろうと思われる。以上のように、選抜、選択的などの表現で特徴づけられる過程を経て一定の集合から答えが選ばれるという点に which 疑問文のひとつの特徴があるという見方が、which 疑問文に関する従来からの主な見方であろう。

このような、既に知られている which の特質は、英語動詞 identify によって表わされる過程のどのような点と関係するのだろうか。そのようなことに関しては、上で言及した先行研究には、明確な記述は見られないように思われる。

4. 同定可能性と which

ここで、which が、「同定可能性」と和訳される identifiability、あるいは、この派生語のもととなった英語動詞 identify によって表わされる意味や概念と、どのように関係するのか、ということについて考えてみることにする。上で概観したように、which の用法に関しては、2段階、もしくは、複数回のステップで対象を絞り込むという特性が見られるという指摘が先行研究に見られるのであったが、他方で、このことは、筆者が以前その存在を提案した identify における〈再度性〉、あるいは、〈非初回性〉という特性を思い起こさせるのではないだろうか。本研究では、identify という動詞の持つ様々な特質のうちでも、特に、この〈再度性〉等の特質が which 疑問文の持つ特性と共通していることを指摘する。既に触れた通り、拙論 (2009b) は、identify に関する〈非初回性〉仮説というものを仮定、提案している。identify に関する〈非初回性〉仮説とは、「identify は、このように何らかの意味で二度目の行為を意味する場合に使われるといった性質、いわば〈再度性〉 (secondness) とでも呼ぶべき意味素性を備えている……」(拙論, 2009b) というものである。(拙論 (2009b) での記述は、〈再度性〉と〈非初回性〉という用語が統一されずに用いられているので、ここでの議論では以後、〈再度性〉と〈非初回性〉のうち、主として〈非初回性〉という用語を優先するかたちで用いることにする。)

このことは、以下の例によって例証されるであろう。

- (2) . . . Madame D. recognized not only the scarf which was found in the thicket, but the dress which was discovered upon the corpse. . . . The articles found in the thicket were fully identified by the relatives of Marie.

(Poe, 1975 : 179)

……茂みのなかで見つかったスカーフだけではなく、死体のまっていた衣類をも、マダム・ドゥリュックは見おぼえがあると確認したのである。……(中略)……茂みのなかから発見された品々は、マリーの親類によって、たしかに彼女のものであると確認された。¹⁾

(ポオ, 田中 他 (訳), 2001 : 163-4)

この例文では、以下のような仕方で、発見、確認の心的過程が観察される。第一の「確認」のプロセスは、recognizedで示されている。その第一の確認プロセスの対象は、(i) the scarf which was found in the thicket「茂みのなかで見つかったスカーフ」と、(ii) the dress which was discovered upon the corpse「死体のまっていた衣類」である。次に、第二の確認のプロセスは、(were fully) identifiedで示されており、「たしかに彼女のものであると確認された」と和訳される。そして、そのプロセスの対象は、(受動文であるため、主語の位置に現れている) The articles found in the thicket「茂みのなかから発見された品々」という表現によって示されている。

上の例文の比較から、第一の「確認」(あるいは、「発見」)のプロセス

1) 引用された例文の中の下線は、引用者(近松)による。以下の例文でも同様である。本稿における用例の収集にあたって、はじめに簡単な予備調査を試み、それから本格的に調査を行った。予備的な調査の時点では、Free eBooks by Project Gutenbergの電子テキストを使用することによって例文の検索等を試みた。そのあと、紙媒体に印刷されて冊子体で発行された書物を使った。本稿に実際に引用されている例は、冊子体の書物からの引用である。

が、identifyの表現で示される第二の「確認」(あるいは、「再発見」)のプロセスに先立っているということを確認できるであろう。

このことに関連して、拙論(2009b)は次のようなモデルを提案していた。

(3) [発見—確認] モデル (あるいは、[発見—再発見] モデル)

ある事物について、最初の「発見」が行われてから、その後それに続いて「再発見」、あるいは、「確認」が行われるという、このような一般的によく見られる過程の型を、ここでは仮に [発見—確認] モデル、あるいは、[発見—再発見] モデルと呼ぶことにしたいと思う。

(拙論, 2009b)

このように、identifyによって表わされる過程は、それに先立つ発見を前提とし、その上で確認、あるいは、再発見によって完結するという点で、少なくとも2段階方式での認識であり、それは、上に示した、[発見—確認] モデル (あるいは、[発見—再発見] モデル) によって模式化された仕方であらう。

先行研究で指摘されているように、identifyによって示され得る過程が成り立つことが、疑問詞whichの使用条件であるとすれば、そして、拙論(2009b)によって主張されているように、identifyによって表わされる意味や概念を捉える上で、<非初回性>仮説や [発見—確認] モデルなどが有効であるとすれば、この<非初回性>仮説や [発見—確認] モデルなどの考え方によって特徴づけられるプロセスが、whichの使用例にも当てはまることが認められるはずであると、本稿は考える。このような考え方を仮に「whichにおける再確認仮説」と呼ぶことにしよう。まとめると、whichにおける再確認仮説とは、「whichは、ある対象について、その再確認的な把握を目的とする問いに用いられる」という仮説である。果たして、そのような再確認的要素は、whichについても実際に認められるのだろうか。以下にそのwhichの例を示す。

- (4) “Is Mr. Morel in?” the damsel would ask appealingly.
 “My husband is at home,” Mrs. Morel replied.
 “I—I mean *young* Mr. Morel,” repeated the maiden painfully.
 “Which one? There are several.”
 Whereupon much blushing and stammering from the fair one.
 “I—I met Mr. Morel at Ripley” she explained.
 “Oh—at a dance!”
 “Yes.”
 “I don’t approve of the girls my son meets at dances. And he is *not* at home.”

(Lawrence, D. H., 土居光知、佐治秀寿 (注釈), 1977 : 72)

「モレルさんはおいでになりますか？」と女が愛嬌 (あいきょう) たっぷりに聞く。

「主人はおります」とモレル夫人が答える。

「いえ—あの、若いほうのモレルさんなんですけど」と女が、言いくそうに説明する。

「どの若いモレルですか？ 何人もいるんですが」

そう言われて、女は顔を赤くし、何度も何か言いかけては、やめたあげくに、

「あ—私モレルさんに—リプレーの村でお会いしたんですの」

「ああ—舞踏会ですか」

「ええ」

「私は息子が舞踏会で会う女たちを好かないんです。それに息子は今うちにいません」

(ロレンス (著), 吉田 (訳), 1970 : 61)

上の引用の中で、“Which one? There are several.” (Lawrence, 1977 : 72) 「どの若いモレルですか？ 何人もいるんですが」(吉田 (訳), 1970) という発言が見られる。この会話の中では、少なくとも、話し手の女性の夫や、引用箇所末尾近くで言及されることになる息子などが、モレル姓の

男性の候補と呼べるものとなる。

上の引用において which 疑問文を発した質問者から見れば、会話の中でモレル姓の男性の集合をまず想定し、その中で、which 疑問文を発話し、その上で、リプレーでの舞踏会というヒントに基づいて、適切な指示対象が自分の息子であることを確認している。この話し手の息子という個人に関しては、まず、モレル姓の男性の集合の一員として、認識され、次に、リプレーでの舞踏会に参加した人物として、再発見、もしくは、確認されている。換言すれば、ある一定の人物について、最初、モレル氏という姓についての情報のみが与えられており、次に which 疑問文を用いることで更に情報を集め、その結果、その人物がリプレーの村で舞踏会に参加していたという情報が加わり、その人物が、ある意味で「再発見」されることになる。このように、同定 (identification) における 2 段階方式での認識が当てはまっていると考える。

このように、which 疑問に関しては、同定と呼ばれる 2 段階方式での認識のうちの 2 つ目のステップに当たる確認 (もしくは再発見) を誘発するよう問いを発する場合に使われていることがわかる。言い換えれば、which がある対象についての再確認的な把握を目的とする問いに用いられているという意味で、上で提案した which における再確認仮説が事例によって確かめられたと言えるであろう。

しかし、このような which の使用例に同定可能性という特質が当てはまるとされるのは、このような 2 段階方式での認識が当てはまるからということではなく別の事情によるのだという、代替的な見方もあり得るかもしれない。そのような which の使用例に関して、指示対象の同一性についての照合という特徴が見られ、そのために、同一性の確認が可能という意味で、同定可能性という特質が指摘されるのだという見方が考えられるかもしれない。例えば、上に引用した会話でも、which 疑問文を発話した話し手本人とその話し相手の間で、(たとえ、質問者が故意にわからないふりをしている可能性があるにしても) 話題の対象として想定している人物に当初食い違いがあり、その可能な指示対象を、会話の中で段階的に調整していき、ついには同一人物を指示するに至るような仕方でいわば指示対象

の照合を行っており、そのプロセスで、which 疑問文が発せられた、といった解釈が可能かもしれない。つまり、指示対象の同一性を確認するというストレートな意味で identification が発話の意図の中心を占めていると考えることが、もう 1 つの可能性として、あり得るのである。

同様の指示対象の照合を目的とした which 疑問文の発話は、次の引用にも見られる。

(5) . . . But in the evening, when she was going out, she asked again :

“Chubby, have you got my gloves?”

“Which?” asked William.

“My new black *suède*.”

“No.”

There was a hunt. She had lost them.

“Look here, mother,” said William, “that’s the fourth pair she’s lost since Christmas — at five shillings a pair!”

“You only gave me *two* of them,” she remonstrated.

(Lawrence, D. H., 土居光知、佐治秀寿 (注釈), 1977 : 175-6)

……しかしその晩、出かけるときに、彼女は、

「チャビー、私の手袋持ってる？」と聞いた。

「どの手袋？」と彼が聞き返した。

「あの黒のスエードの」

「いいえ」

皆が手袋を探してまわって、彼女がそれをなくしてしまったことが明らかになった。

「これでクリスマス以来、手袋を四つなくしているんですよ」とウィリアムが言った、「それも、一組五シリングもする手袋なんだ」

「私にだって二組しかくれなかったのに」と彼の母親は言ってその贅沢 (ぜいたく) に抗議した。

(ロレンス (著), 吉田 (訳), 1970 : 140-1)

この例でも、想定されている指示対象を統一できるようにという、対象照合の目的で、which疑問文が発せられている。このような場合には、指示対象の同一性（identity）を確認するということが発話の意図の中心を占めていると言えるだろう。

以上のように、同定可能性とは、同一性の確認といった意味、用法を中心に解釈するべきではないか、という見方もあり得るだろう。しかし一方で、2段階方式での認識という、もう1つの特質も、やはり上の例について観察することが出来る。上の手袋に関する会話では、which疑問文に先立つ、“Chubby, have you got my gloves?”「チャビー、私の手袋持っている？」という発言を受けて、which疑問文の話し手は、複数の異なる手袋の可能性を想定しながら、疑問文“Which?”「どれ（どの手袋）？」を発し、それに対して、話し相手が、“My new black *suède*.”「私の新しい黒のスエード（あの黒のスエードの）」という返答により、手袋を具体的に特定している。このように指示対象の照合を目的とるように見える which 疑問文であっても、やはり繰り返しの段階を踏んで指示対象（上の例では、手袋）を確認する過程が確実に関係している。これらの事例においては、対象の同一性を照合、確認するための which の使用という特質と、2段階方式での認識という特質の両方が見られるのである。このように、which に関する2つの異なる特質は、互いに排除し合う関係にはなく、両立可能であると考えられるであろう。

一方、次のような独白的な例では、意図する指示対象の照合ということは生じ得ない。そのため、identifyによって表わされるような過程が観察されるとすれば、それは、もっぱら自問自答のかたちで行われる、2段階方式での認識の過程を示すものと考えられる。

- (6) Might manage a sketch. By Mr and Mrs L. M. Bloom. Invent a story for some proverb. Which? Time I used to try jotting down on my cuff what she said dressing. Dislike dressing together. . . .

(Joyce, 1986 : 56)

スケッチ

写生文くらいなら何とか書けるかもしれない。ブルーム夫妻作。

ことわざ
諺をひとつの物語に仕立てようか。どんな諺？ 彼女が着替きがえをしながらしゃべることをカフスに書きとめたこともあったな。いっしょに着替きがえをするのは厭だ。

(ジョイス (著), 丸谷、永川、高松 (訳), 1964 : 86)

上の例では、まず、書き手本人が、“Invent a story for some proverb.”「何らかのことわざについて1つの物語を創り出そう (諺ことわざをひとつの物語に仕立てようか。)」という文で、some proverb「何らかのことわざ」ということを1度示したうえで、“Which?”「どれ? (どんな諺?)」と自問している。このwhich疑問文への回答は、明瞭なかたちで現れていないように見えるが、しかし、初めにことわざということを曖昧に想定し、その上で、ことわざの内容を明確に特定しようとしているということではある。つまり、2段階方式での認識を行おうとして、そのうちの第2段階目の認識を誘発しつつあるのが、この“Which?”で表わされる疑問文だと言うことが出来るのである。

次に、以下の例は独白ではなく、会話の一節であるが、テキストには会話の一方の話し手の発話のみが記されている。その点で、表面的に独白に似た性格を持つ。2つのwh-疑問文を連続的に発することで、2段階方式での認識が典型的なかたちで観察される。

- (7) — Yes, *Evening Telegraph* here, Mr Bloom phoned from the inner office. Is the boss . . . ? Yes, Telegraph To where? Aha! Which auction rooms? . . . Aha! I see. Right. I'll catch him.

(Joyce, 1986 : 106)

—ええ……こちら「イヴニング・テレグラフ」です。ミスター・ブルームが奥の事務室で電話をかけていた。大将は……? ええ、「テレグラフ」です。どちらへ……? ほうほう。どの競売場で……? ほうほう。なるほど……判りました。なんとかつかまえますよう。

(ジョイス (著), 丸谷、永川、高松 (訳), 1964 : 160)

上の例では、一度、“To where?”「どちらへ……？」という疑問文が発せられた後で、“Which auction rooms?”「どの競売場で……？」という、もう1つの疑問文により更に詳述することを相手に求めている。この例では、2段階方式での認識のうち、whichが第2段階目の認識を促すようテキスト上に配されている。

一方、次の例では、whichの生起している箇所に行先する文脈内に、whichの回答として考えられ得る可能な対象の候補を直接示す語句は見られない。

- (8) She agreed, and they went past the Castle into the Park. He was afraid of her. She walked moodily at his side, with a kind of resentful, reluctant, angry walk. He was afraid to take her hand.

“Which way shall we go?” he asked as they walked in darkness.

“I don’t mind.”

“Then we’ll go up the steps.”

(Lawrence, D. H., 土居光知、佐治秀寿 (注釈), 1983 : 407)

クララは賛成して、二人は城を通り過ぎて公園に行った。ポールは、クララに遠慮していた。彼女はポールと並んで、怒ったように、いやいや出てきた感じで歩いていた。彼は、クララの手を取る気になれなかった。

「どっちに行こう？」と彼は聞いた。二人は暗闇の中を歩いていた。

「どっちでもいいわ」

「それじゃ階段を登って行こう」

(ロレンス (著), 吉田 (訳), 1970 : 327)

この引用では、2名の会話参加者は、散歩中の人物であり、同じ場面を共有しており、目の前の道の進むべき方向について、選択を行う必要がある。従って、可能な回答の候補（ここでは、進路、方向）となるものの集合は共有された知識となっており、指示対象の照合や同一性の確認という

意図は見られない。会話の中には which を含んだかたちでの 2 段階方式での認識過程は明確には認められない。which 疑問文の回答の選択肢となるものは、会話内で明示的に言語化されるかわりに、話し手、聞き手の共有している言語外の現実の空間や状況の中にそれらの可能な選択肢が与えられているのである。いわゆる直示的な指示を思わせる要素がある。

このほか、描かれている言語外の現実の状況に依存するかたちで which が用いられるケースとして、物理的な事情から二者択一的な質問にしかない物事について問うときにも、which が用いられるケースがある。例えば、次の例のような場合がそれである。

- (9) Mr Bloom gazed across the road at the outsider drawn up before the door of the Grosvenor. The porter hoisted the valise up on the well. She stood still, waiting, while the man, husband, brother, like her, searched his pockets for change. . . . Drawing back his head and gazing far from beneath his veiled eyelids he saw the bright fawn skin shine in the glare, the braided drums. Clearly I can see today. Moisture about gives long sight perhaps. Talking of one thing or another. Lady's hand. Which side will she get up?²⁾

(Joyce, 1986 : 60)

ミスタ・ブルームは道路のむこう側、グローヴナー・ホテルの入口にとまっている二輪馬車を見つめた。ポーターが旅行鞆を荷物台にほうりあげた。女がじっと立って待っている横で、男が、夫か、それとも似ているから兄弟だろうか、ポケットの小銭を探している。……(略)……彼が頭をそらし、かぶさった^{まぶた}瞼の下からじっと眺めると、日ざしを浴びた手袋の鹿皮の輝きと飾り紐が見えた。今日はものがはっきり見える。湿気があると遠くまで見えるんだろかな。とりとめのないおしゃべり。上流婦人の手。どちら側から彼女は乗るんだろう？

2) この最後の文は原文のまま。

(ジョイス (著), 丸谷、永川、高松 (訳), 1964 : 90-1)

上の例では、二輪馬車が停車しており、客の女性が乗車しようとして待っている様子が描かれており、その女性がどちらの方向から二輪馬車に乗車しようとしているのかを予想しているところを描いているものと思われる。この場合、二輪馬車 (outsider) を表わす語は先行文脈に現れているが、上の引用の末尾にある疑問文、“Which side will she get up?” 「どちら側から彼女は乗るんだろう？」における“Which side...”のsideという語(あるいは、その語によって指示されるのと同じ事物を示す、その他の表現)自体は、先行文脈内には直接的な仕方では現れていない。従って、二輪馬車の形状や、二輪馬車に乗車する際の常識などから、質問が自然に二者択一的なものとならざるを得ない状態になっているのだと考えなくてはならない。

上のケースへの類例として、次のような例が見られる。即ち、埋葬の際に、棺 (coffin) を礼拝堂にかつぎこむ場面で、以下のように述べる箇所が見られる。

(10) Which end is his head?

(Joyce, 1986 : 85)

どちらが頭かな？

(ジョイス (著), 丸谷、永川、高松 (訳), 1964 : 129)

これなども、棺の形状や性格から必然的に二者択一的となる。棺自体は、先行文脈で言及されているが、どちら側なのかを示す語句(仮に「選択肢」が「右側」と「左側」であるとすれば、そのように明確に「右側」と「左側」を示す語句)は、この例文が出てくるまでは文脈には見られない。

このように、たとえwhichが用いられていても、テキスト内で(あるいは、会話内で)、2段階方式での認識を具体的な語句のかたちで(つまり、形式的に明確な仕方)確認できない場合があるということ、そし

て、その上でなおかつ、テキストが描写している実際の状況を考慮すると、広い意味で二者択一的となっているというケースが見られる。このような場合は、明示的な仕方では、2段階方式での認識ということを認めることはできないが、一方で、テキスト外の場面や空間が which を用いた問いに対して、その可能な指示対象について、あるいは、可能な回答の候補について、一種の制約を課しており、そのような点では、2段階方式での認識様式と似た要素があると言えるように思う。

5. 結び

以上、which の文体的な扱いについて理解を深めることを目指しながら、which の言語学的特徴づけを試みてきた。その中で明らかになったことは、概ね以下のようにまとめることができる。

- (11) 先行研究における議論から、identify によって表わされる心的過程が which の使用と密接な関係を持つことが予想されるが、特に identify の持つ〈非初回性〉という特質が which の使用の際の2段階方式での認識という心的過程についての特質と合致する。

このことは、本稿の前半において提案された which における再確認仮説(すなわち、「which は、ある対象について、その再確認的な把握を目的とする問いに用いられる」という考え方)を、identify における〈非初回性〉と関連付けた仕方で、確証したことを意味する。

概ね、以上のようなことを本稿は論じてきたが、ここで行った which に関する議論が、知識・情報の収集・提供という言語使用の動機の主要な一部分を形作る要素について、語用論、その他の分野で、今後の議論を少しでも促すことにつながれば幸いである。現段階では、不明な点も少なくないため、今後、更に考察を深めていくことが重要と考えている。

参考文献

- Declerck (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum (2002), *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 井上和子 (2009), 『生成文法と日本語研究』, 東京, 大修館書店.
- 久野暉 (1983), 『新日本文法研究』, 東京, 大修館書店.
- 益岡隆志 (1991), 『モダリティの文法』, 東京, くろしお出版.
- 拙論 (2003), 「英語関係詞節における部類指定と機能的有標性」, 『大阪学院大学国際学論集』, 第14巻第2号.
- ____ (2006), 「英語における修飾節：関係詞節に関する理論」, 丸善京都出版サービスセンター (製作).
- ____ (2009a), 「用法問の相違とidentifyを特徴づけるもの — identifyという語の意味 (1) —」, 『大阪学院大学国際学論集』, 第20巻1号, pp.147-171.
- ____ (2009b), 「Identifyの類義語について — Identifyという語の意味 (2) —」, 『大阪学院大学国際学論集』, 第20巻2号, pp.57-112.
- ____ (2010a), 「Identifyの反意語 — Identifyという語の意味 (3) —」, 『大阪学院大学国際学論集』, 第21巻第1号, pp. 57-96.
- ____ (2010b), 「Identifyの意味についての関連問題 — Identifyという語の意味 (4) —」, 『大阪学院大学国際学論集』, 第21巻第2号, pp. 15-62.
- Free eBooks by Project Gutenberg*, Project Gutenberg Literary Archive Foundation (PGLAF), 2008-11. Web. 16 September 2008, 26 February 2011. <http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page>.
- (使用テキスト)
- Joyce, James (1986), *Ulysses*, London, The Bodley Head.
- Lawrence, D. H., 土居光知, 佐治秀寿 (注釈) (1977), *Sons and Lovers, Vol.1*, (*Kenkyusha British & American Classics*), 東京, 研究社.
- Lawrence, D. H., 土居光知, 佐治秀寿 (注釈) (1983), *Sons and Lovers, Vol.2*, (*Kenkyusha British & American Classics*), 東京, 研究社.
- Poe, Edgar Allan (1975), *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*, New York, Vintage Books, A Division of Random House.
- ジョイス (著), 丸谷才一, 永川玲二, 高松雄一 (訳) (1964), (『世界文学全集 II -13/ ジョイス ユリシーズ I』), 東京, 河出書房新社.
- ポオ, E・A著, 田中西二郎 他 (訳) (2001), 『ポオ小説全集 3』, 東京, 東京創元社.

ロレンス, D.H. (著), 吉田健一 (訳) (1970), 「息子と恋人」, 吉田健一, 露沢忠枝, 福田恆存 (訳) (1970), 『新潮世界文学39/ロレンス I』, 東京, 新潮社.